

歐陽修の歌

金 敬 邁

外 文 出 版 社

北 京

歐陽修の歌 (下)

金 敬 邁

外 文 出 版 社

北 京

歐陽海の歌 下

~~電話東京812局3604・7948~~

1966年 初版発行 1967年5月再版 定価 320 円

著 者 金 敬 邁

出 版 者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万莊)

発 行 者 中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. Box 399)

編号: (日)10050-650

10-J-785P

00180

下 卷 目 次

第六章 「機関車」	1
二十六 階級的兄弟	1
二十七 本を買う	11
二十八 「問題はどこに」	20
二十九 源泉	31
第七章 帰 省	42
三十 「兄さんは？」	42
三十一 野草	52
三十二 「ぼくの名は解放軍」	63
三十三 タバコの葉	72
三十四 万里を駆ける靴	82
三十五 親しい人の期待	91
三十六 通信班長	97

第八章 あらたな試練……………105

三十七 重荷をになう……………105

三十八 正しい処理……………121

三十九 誤解……………132

四十 「善意をもつて人にたいする」……………141

第九章 烈火のなかへ……………157

四十一 「雷鋒の戦友」……………157

四十二 批判されたとき……………169

四十三 高い規準……………182

四十四 革命をやる……………198

第十章 顔色も変えず、呼吸も乱さず……………210

四十五 矢をつがえる……………210

四十六 山頂……………221

四十七 あこがれ……………231

四十八 南岳の紅葉……………241

あとがき……………253

第六章 「機関車」

二十六 階級的兄弟

革命軍事委員会拡大会議の「軍隊の政治思想工作を強化することに関する決議」は東の風に乗って、全軍の隅々にまで伝えられ、すべての指揮員、戦闘員の胸にしみわたっていった。見たまえ！ 大隊管区のいたるところに「毛沢東思想の赤旗を高くかかげて勇敢に前進しよう」と書かれたスローガンが張りめぐられ、兵舎という兵舎に「四つの第一を堅持しよう」*「大いに三八作風をおこそう」*と書かれた木札がたてられている。耳を澄ませてみたまえ！ 同じ中隊なのに、今日の足どりはみちがえるほど力強く、スローガンも以前よりいちだんと雄壮で、歌声までがいつもよりずっと澄んでいて、

高らかにひびいている。革命軍事委員会と林彪同志は、毛主席の建軍思想にもとづいて、人民解放軍を高度にプロレタリア化し、戦闘化する道を急速に、飛躍的に前進するように指導している。

* *

一九六〇年十月、林彪同志は人民解放軍のある高級幹部会議で、毛主席のこれまでの指示と当面の実際の状況にもとづいて、政治工作の分野におけるつぎの四つの関係を正しく処理することについて、問題を提起した。この四つの関係とは、武器と人の関係、諸工作と政治工作との関係、政治工作における事務工作と思想工作との関係、思想工作における書物による思想と生きた思想との関係のことである。この四つの関係を解決するための原則は、人の要素が第一、政治工作が第一、思想工作が第一、活きた思想が第一ということである。つまり、人びとの思想工作をよくやらねばならないということである。これは現代化した革命軍隊を建設するための政治工作の方向であり、軍隊建設全体の方向である。毛沢東同志は抗日戦争の時期に、人民軍隊が長期の革命闘争のなかでつちかってきたすぐれた作風を

三つの句と八つの文字に概括した。これを簡潔に「三八作風」という。三つの句とは、確固とした正しい政治方向、刻苦質ばくの作風、弾力性と機動性にとむ戦略・戦術、八つの文字とは、団結・緊張・嚴肅・活発をさす。

歐陽海はこの新しい時代のリズムに乗って、意気はつらつと病院から帰ってきた。

大隊の大門を入るなり、関英奎にぶつかつた。

「おーっ！ 帰ってきたか！」関英奎はさぐるような目つきで、歐陽海を上から下までじろじろと眺めまわした。それから、あまり信用できないといった顔つきでたずねた。

「退院してきたのか？ ばかに早いじゃないか！」

「中隊長、これでも早いですか？ 一ヵ月以上ですよ！」

「すっかりよくなったのか？」

「ええ」

「逃、逃げて帰ってきたのじゃないんだろうなあ？」と関英奎はこわい顔をしていった。

「いいえ」歐陽海はあわてて退院証明書を中隊長に渡

して、簡単に入院の状況を報告した。「先月の末には退院できると思っていました」

「しかし、どうして昼からの車で帰ってこなかったんだ？」

「中隊長、この一ヵ月あまり本当に息がつまりそうでしたよ。それで、一分でも早く帰ろうと思って、小演習のつもりで、三十キロを急行軍してきました」

「なかなかやるな。三八作風の意気ごみじゃないか」関英奎はやつとかれの手を力強く握つた。「中隊ではちようど人手が足りないのです、きみに第三小隊の副小隊長をやってもらふことにしたよ」

歐陽海はびっくりして口をあけたまま、関英奎の顔を見てどぎまぎした。かれは中隊長が以前自分に、機関車は大きな力をもっているが、それが貨車を捨てて、それだけで前へ進んでしまったのではなんの役にも立たないといったのを思いだした。幹部にいちばん要求される任務は大衆を立ちあがらせることだ……かれは思った。「副小隊長という任務は、小隊長といつしよに一個小隊を引っぱってゆくことなんだ。おれにそんなことが……」

関英奎は、かれがいくらたっても返事をしないのでたずねた。

「どうした？ やりたくないのか？ やっぱり好かんのか？」

「革命をやるのに好き嫌いをいってはおれせんよ！ ただおれはやれないんです！」

欧陽海がいったのは本心だった。分隊長としても、まだ全分隊を指導しきれないのに、副小隊長なんて……

「なんでやれないのだ。われわれが戦士になったときは、大隊長だって、連隊長だってみな二十歳そこそこの青二才だった。赤軍時代には、十八歳の師団長も一人や二人ではなかったというじゃないか！」

入隊して二年にも満たない欧陽海にとって、副小隊長という任務はたしかに重荷にちがひなかった。かれは思った。「自分には経験もないし、教養もない、どうしてこれをやりとげられるだろうか？」

関英奎はまるで欧陽海の胸のうちを見すかしたように、引き出しから一通の手紙をとりだしていった。

「曾^{ツォン}さんが四、五日前におれんとこへ手紙を送ってき

たんだが、きみにもこれを送ってきたよ。見てみる」

欧陽海は受けとってみると、林彪同志の最近の自筆の文字が印刷されていた。

毛主席の本を読み、

毛主席の話を聞き、

毛主席の指示にもとづいてことをおこない、

毛主席の立派な戦士になろう。

「欧陽海、われわれはいまじつに幸福だなあ！ 革命軍事委員会、林彪同志がわれわれに代わって、こんなにはつきりと前進の道をさし示してくれている。人民解放軍が無から有に、小から大に発展したのも、すべて毛沢東思想に頼ったからだ。これは数十年らしいの成功した経験がはつきりと実証している」関英奎は林彪同志の題字をさしていった。「われわれがすっかりこの四つの言葉にもとづいてやり、毛沢東思想を真に身につけたら、これからの仕事をすべて立派にやりとげることができる」

「けれども、おれの水準じゃ……」

「水準はゆつくりと高めてゆくものじゃないか、なに

も恐れることはない！ 困難がおきたり、問題にぶつかったりしたら、直接毛主席の著作に教えてもらえばよいのだ。戦争の時代には、主席の著作はガリ版刷りすら手に入りにくくて、同志たちは塹壕のなかでまわし読みしたものだ。ところが、いまでは『毛沢東選集』第四巻も出版された。われわれが毛主席の著作を実際に結びつけて学び、実際に活用できるようになって、どんなことでも主席の指示どおりにやれるようになれば、どんな困難も、われわれをさまたげることはできないし、どんな任務をあたえられても、われわれはひるむことはないだろう！」

欧陽海は林彪同志の題字を見つめながら、心のなかで深く自分を責めた。いつも口ぐせのように、毛主席の話を聞かねばならないといっているが、どうして自覚的にやれなかったのだ？ 毛主席は「重慶交渉について」のなかではつきりといっている。「苦勞のいる仕事は、われわれの目の前におかれてゐる荷物のようなもので、それをかっただけの勇氣がわれわれにあるかどうかが問題である」また、「……楽しみは人にゆずり、荷物は重いのをえらんでかつぎ」……こうした言葉は自分もおぼ

えている。それなのに、どうしてどんなことでも、いつでもこの指示にもとづいてやれないのだろうか？ 愚公は山さえ移そうとしたのに、おれは「副小隊長」というこの荷物さえかっただけの勇氣がないのだ。これで共産黨員といえるだろうか、革命戦士といえるだろうか？

「中隊長、おれ、だんことして命令にしたがいます。支部からのできるかぎりの援助をおねがいします。かならずいつでも、どんなことでも、毛主席の指示にしたがってやります」

「そうだ、そうでなくちゃいけない。きみももう副小隊長になったのだから、中隊はきみにたいしていっそうきびしく要求してゆく。いまのところ、きみたちの第三小隊には、高翼中カウイングンの問題がかなり多く出ている。だが、これまでのように、この貨車をほうりっぱなしにして自分だけ前へ進むようなことはやってはならない。副小隊長のもっとも大切なことは政治を統帥として、活きた思想をしつかりとつかむことだ。部隊はもうじき階級教育をやるが、きみはよくこの問題をかみしめておいてもらいたい」

「はい！」

欧陽海は二つの大きな目をキラキラと輝かせながら、中隊長のこの指示を頭のなかで繰り返していた……

竜虎のように活気に満ちた中隊の空気が、にわかに変わってしまった。訓練のあとも、食事の前も、同志たちは満腔の怒りをこめて、最近おぼえたばかりの公誰が誰を養うのかを歌っている。球技場のスピーカーからは、たえず楊白勞^{ヤンバイラウ}と喜兒^{レイエール}の悲しみと憤りにみちた歌声が聞こえてくる。部隊は「搾取の実態がわからなければ、革命もわからない」という林彪同志の教えにもとづいて、いましも「兩億三查」*運動を広く深く展開していた。

＊

「兩億三查」の運動とは、中国人民解放軍が、戦士の自覚を高めるためにおこなっている政治教育の一つである。「兩億」とは階級的な苦しみ、民族的な苦しみを思い出すことをいい、また「億苦」、「訴苦」ともいう。「三查」とは、立場を点検し、闘志を点検し、仕事を点検することという。

支部書記関英奎の呼びかけがあつていい、同志たちはしだいに忘れかけていたむかしのことを思いだそうと

つとめていた。小隊での「億苦」の典型になった欧陽海は、いま発言のための準備をしていた。かれは小さなノートを持って練兵場を行ったり来たりしながら考えていた。だが、どこから話せばいいのか考えがまとまらなかった。解放されてからまだ十数年にしかならないのに、なんと大きな変化だろう！ 経済的に解放されたことはともかく、政治面からいっても、いまでは、家族全員が公社の社員となり、社のさまざまな事柄について、誰でも聞くことができ、誰でも管理することができるようになっている。なん年前か前、人民代表を選出するとき、お母さんまでが選挙民証を持っていたって、投票用紙をもらい、かの女の信頼できる人の名前の上に丸をつけたのだ。むかしでは夢にも見られないことだった！……だが、億苦大会では、こんなことばかり話すわけにもゆかない！……

欧陽海はなおも練兵場を行ったり来たりしながら、どこから話そうかと、しきりに自分にたずねていた……

歩いているうちに、欧陽海は足の下が軟らかく、ぬるぬるしているのに気づいた。下を見ると、いつのまにか練兵場の端の雨水の溜まったくぼ地に來ていた。靴はじ

くじくになり、湿った土の上に一筋の足あとがついていた。この足あとは、老鴉窩ラウヤウコから蓮溪リエンシまで、十五華里の吹雪の原野を歩いてきた足あとではないだろうか？ この足あとは、蓮溪の街で一軒一軒乞食をして歩いた悲惨な幼年時代に歐陽海をつれもどした。眉をひそめ、かすかにくちびるを震わせていたお母さんの苦しそうな面影が目の前にちらつき、耳もとで四妹スーイのかすれた泣き声がまたひびいたような気がした……かれは小さなノートをあけて、すぐにこのことを書きとめようとした。けれど、すぐ思いなおしてノートを閉じてしまった。十数年の年月が過ぎ去ってしまったが、この心に刻まれた傷は、まるで昨日のここのように、目をつぶっていても見ることができ、手を伸ばせば触れることもできるのだ。なにを書くのだ？ 歐陽海の家オウヤウヘの苦しかったときの思い出は、いくら書いても書きつくすことができない、いくら訴えても訴えつくすことができない！

装いを変えたクラブの壁には、多くの同志の家庭の血涙の歴史とあざやかなスローガンが張られていた。同志たちは整然と小さな椅子に坐って、首をたれてそれぞれなにかを考えていた。

歐陽海はその前に立って、うつむいて足の先に目を落としながら、自分の風雪のなかの幼年時代を話していた。かれはあやうく雪のなかに捨てられそうになったことから、名前のこと、女の子の姿をしていたこと、そして、兄が捕えられていったこと、物もらいに出た姉が嫁げなかったことを話した。さらに、炭焼きがまのそばで吹雪にあったこと、劉大斗リウダウトの屋敷の腹黒い犬と人間のことを話した。かれの悲痛な訴えは、同志たちのかすかなすすり泣きの声と混じって一つにとけあった。

「……おれの家の四妹は、大晦日の晩にとうとう飢え死にしてしまった。つぎの日の元旦の朝、劉大斗は土地を取りあげたばかりか、おやじを村役場までひたてていつて、なん時間も木に吊り下げた。おやじの身柄を引きとるために、おふくろは街へ行って包丁で自分の腕の肉を切り、地主の息子らに汁にして飲ませてやった。

……そのころ、おれは知らなかったんだが、おふくろは兄弟姉妹を九人も生んでいて、おれが生まれる前後に、そのうち五人まで飢え死にさせていたんだ！ おれが物心ついてから解放されるまで、おれは『暖かい』ということ、『腹がふくれる』ということがどんなことなのか

知らなかった。腹がすけば、冷たい水を飲み、寒くなれば、体に草をかぶせた。老鴉窩の冬はおそろしく寒かった！ おれの家のものはあえぎながらかうじて生きながらえていた。そのとき、もし共產党が来てくれなかったなら、おれ、欧陽海もあの五人の姉妹と同じように、とつくに山のなかで凍え死んでいただろう……」

欧陽海の苦しかったおいたちを聞いて、同志たちはそれぞれの胸の傷に触れられ、あるものは声を出して泣き、あるものはこぶしを握って地面をたたいた。第三中隊は怒りと悲しみに包まれた。

欧陽海はあふれる涙をせいっぱいこらえながら、つづけて話した。

「おふくろはおれの命は雪のなかから拾ってきたのだというが、おれは共產党がおれにくれたんだと思っている。だから、いま党が要求すれば、おれはなんでもするつもりだ。革命がおれに犠牲になることを必要とするなら、おれは胸をはってこの命をささげる。同志たち！ この世界の三分の二の地域は、まだ人が人を食う社会だ。この五大州におれのむかしのようによく苦しみをうけている人がどんなに多くいるかしのれないのだ！……」

欧陽海は訴えをおえて、重い足をひきずりながら自分の席にもどった。同志たちの泣き声はやまず、会話はやつづけられなくなった。関英奎はみんなの気持ちを静めるために、立ちあがって、十分間の休憩を宣告した。

人びとのなから誰かが叫ぶのが聞こえた。

「おれ、もう黙っておれません、同志たち！」

叫び声とともに、一人の戦士がよろめきながら台の上に駆けあがった。

はじめは、かれはかなり落ち着いて話していた。かれの家は漢口ハンコウにあり、おふくろさんは早く死んで、おやじさんは病院を経営している外国のだんなの小使をしていた。三十年のあいだ、朝早くから夜遅くまで、この外国のだんなのために体をすりへらして働いたが、一家三人の腹を満たすことはできなかった。かれは年老いるまで牛馬のようにこき使われたが、肺病を患うと、とたんにはうり出され、腹をすかせたかれら姉弟二人を残して病院の門の前で死んでしまった。すると、その外人は急に「慈善心」をおこして、姉にかれの病院の「看護婦」をやるようにといった。

「……おれは、はじめ、その外国人はいい人だと思い

こんでいた」話しているその戦士の声の調子は変わっていった。「ところが、意外にも姉は仕事についてから、ますます体が悪くなり、家に帰ってくるたびに顔色がかの女の白衣のようにあおざめてゆくのだ。あるとき、椅子に坐っていた姉が、立ちあがったとたん、目まいをして倒れてしまった。おれは病氣じやないのかとたずねたら、姉は泣くばかりでなにもいわなかった。ある日、病院の門番のじいさんが姉を背負って帰ってきた。おれはそのときはじめて、外国人はなにも姉を「看護婦」にしていたのではないということを知ったんだ。姉は……」

その戦士はくちびるをかんだまま、話せなくなった。欧陽海はふと顔をあげて台の方を見ると、思いがけないことに、話をしていたのは高翼中だった。かれはせきこんでたずねた。

「なんで話さんのだ？ 早くつづけろ！」

「……おれの姉は子供のころになんとも重病にかかったので、外国人は姉の血液のなかにいく種類もの免疫力があるといったのだ。姉を「看護婦」にしたのは、姉の血を取るためだったのだ。かれが「慈善心」をおこしたのは、姉を造血機械にするためだったのだ！……欧陽海

のおふくろさんは自分の腕の肉で借金を返そうとしたが、おれの姉は自分の血で食いぶちを買っていたのだ。旧社会では誰もおれたちを人間扱いにしなかった！」高翼中は自分の胸をたたきながら、「それに、おれはいま、少し汗を流せばつらがり、少し余計に仕事をすれば音をあげてしまう……こ、これで、おれは誰に申しわけが立つだろう！」

涙で語られたこの一言一言の告発は、あたかも無数の針のように欧陽海の胸を疼かせた。かれは激しく胸をゆすぶられて立ちあがり、いきなり怒鳴った。

「この民族の恨みを忘れるな！」

「高翼中の苦しみはわれわれみんなの苦しみだ！」

「階級的兄弟の仇を討て！……」

悲しみは怒りとなり、恨みは力となった。もう誰も泣くものではなく、誰もため息をもらすものもなかった。みんなの充血した目は地面を見つめ、堅く握りしめられた一つ一つのこぶしは突きあげられた。クラブはスローガンでどよめき、第三中隊全体が沸騰した。

……ベッドに横になっている高翼中の目は赤く腫れて

いた。欧陽海がうどんの鍋を持って入ってきた。

「小高、まる一日も飯を食わずにどうするんだ？ 早く起きてうどんでも食えよ」

欧陽海はどんぶりによそって、ベッドの前に持っていた。

「すみません、副小隊長、おれ、本当に食えないんです」

「少しでも食えよ。体は革命のもてだからな」

「体が革命のもてだ」という言葉は、暖流のように高翼中の全身に伝わり、かれは恥ずかしそうにうつむいた。

欧陽海はうどんを持ってベッドのそばに立ったまま、胸を高ぶらせながらあれこれ考えた。

「おれは老鴉窩の山の生まれで、かれは漢口の都会の生まれだ。生まれはなん百里なん千里と離れていても、二人の運命は一本のつるに生えた二つの瓜と同じで、同じ苦しみをなめ、同じ楽しみを味わってきたのだ。おれの体には階級の苦しみがやどっており、かれの体には民族の恨みがやどっている。世のなかのどこにも苦しみをうけてきた人びとがいる！……」

「目の前に寝ているのは、自分の同志であり、自分の戦友であり、階級的兄弟ではないか？ 数ヵ月前も、かれはいまと同じような格好で寝ていた。そのとき、おれはかれに一言もやさしい言葉をかけてやらなかった。いちどもやさしい顔をしてやらなかった。これはたんなる工作方法の問題ではない。もっと重要なことは階級的感情の問題だ。おれは感情の面でかれを同志として見ていなかった。かれを自分の階級的な肉親であると見ていなかったのだ！

「周小隊長や曾指導員はおれが歩けないときには、おれに手をかして歩かせてくれたし、ようやく歩きだしたときには、正しい道を歩けるように導いてくれた。貧農出身のおれのために、指導員はどれだけ眠れない日があったか！ 自分のやったあれっぽっちの仕事も、党が手をとって教えてくれたのだ。自分の立てた手柄も、指導者や同志たちが心血を注いでやってくれたのだ。これはおれになにか腕があったからではない。革命事業のために、無数の階級的兄弟たちの手が自分を引っぱって前進させてくれたのだ。」

「それなのに、おれは指導員とはまるでちがう態度で

高翼中に接してきた。かれが都会からやってき、おれが村からやってきたのも、共通の革命の目標がわれわれを全国の津々浦々から集めたのだ。毛主席は、『革命の部隊のすべての人は、たがいに心をくばりあい、いたわりあい、助けあわなければならない』と教えている。階級的観点から出発せず、階級的感情をもたないで、どうして主席の本が読めるだろうか？ また、主席のいったこれらの言葉を、どうして本当に理解できるだろうか？ おれは、支部の期待にも、曽指導員の期待にもそむいている！……」

自分にたいして注いでくれている党の深い愛情を思いだして、欧陽海は涙ぐんだ。かれはしっかりと高翼中の手をとっていった。

「高翼中同志、いままでおれがまちがっていた。おれはきみにすまないことをしていた。誤りをみとめるよ。旧社会では、おれたち二人はともに虐げられた人間だった。だが、いまは、おれたちは革命の立派な同志だ。おれのあつた態度をきみの記憶からぬぐいさつてくれ」

「いいえ、副小隊長、おれがまちがっていたんです。おれはむかしの苦しみを忘れてしまっていたんです！」

「小高、きみが悪いんじゃない。おれは階級的兄弟とはなにかということをも、まだ本当に知らなかったのだ」

苦しみをなめつくしてきた手と手は握りあい、二人の戦友は無言のまま、目でそれぞれの過去の誤りにたいする後悔の気持ちとこれからの決意をあらわしあつた。

革命をめざす同志の階級的感情は、堅く握りしめられた二つの手を通じてひとつにとけあつた。

二十七 本を買う

土曜日の夕食のあとの練兵場は、活気にあふれていた。一日じゅう訓練をやった戦士たちのどこからこんなエネルギーが湧いてくるのだろうか？ 手榴弾が空を飛び、銃剣を練習するかけ声があたりを震わし、バスケット・ボールに興ずる戦士たちの喚声が騒々しくひびいている。跳んだり、叫んだり、その騒がしいことといったら、軒先の雀さえ巢に寄りつけないほどだ。

暴れることの好きな欧陽海が、球技場に姿を見せる回数、ますます少なくなっていく。かれも球技をしたいし、遊んでみたいのも山々だった。だが、毛主席の著作の学習がみんなよりおけているということが、心にひっかかって離れない。いつも遊びたくなったとき、かれは自分にこういいます。「おれはほかのものと同じじゃない。みんなは主席の本が読めるが、おれは一

字一字これからおぼえてゆかねばならないのだ。たくさん字がわからないし、わかったとしてもしゃべれない。曾指導員も、『ばかな人間は早起きし、ばかな鳥は早く巣をたつ』といていたが、おれもできるかぎり時間をさいてやらなきゃだめだ」

欧陽海は『毛沢東選集』第三巻と『新華字典』を持って、球技場を避けて裏の丘に登った。かれはもういちど『愚公、山を移す』の文章を読もうと思った。病院で二度読んだときは、ただ、愚公という人が家の前の二つの大きな山を掘りくずそうとしたということしかわからなかった。毛主席がなぜこの文章を書いたのか、またこの文章にはなにが書かれているのか？ こういうことはかにもくわからなかった。

夕焼けが空をそめ、本の上に黄金色の光をおとした。欧陽海は一字一字読んでいった。少し読んで、その意味を繰り返し考えた。党の第七回全国代表大会が開かれた一九四五年ごろは、中国はどんな情勢にあったのか？ なぜ毛主席は、抗日戦争がまだ終わらないうちから、国民党の敗北と中国人民の必勝を予見できたのだろうか？ ……かれはすぐ感動して自分にいった。「毛主席はじ

つに英明だなあ！ 天下の情勢が、あの方には手にとるようにわかるのだ。革命の車輪はあの方の指示にもとづいて進んでいるのだ！」そういうしながら、かれは矢も盾もたまたらずつづけて読んでいった。「愚公は智叟のあやまった考えを反駁し」という句まで読んだとき、「叟」と「駁」という二字がわからなくなった。かれは字引きを引こうと思ったが、空はもう暗くなっていて、字引きの小さな文字はぼんやりとして読みとれなかった。

欧陽海はフッと残念そうに吐息をもらした。「文章の精神がまだつかめないうちに、たちまち自由時間がすぎってしまった！ 小高ぐらいの教養がありさえすりやなあ。学習の進歩もずっと早くなるんだが！」自分はときとぎれとぎれにやっと一年半業余学校に通っただけで、学校らしい学校の門をくぐったことがない。いまのこれだけの知識だって、新聞や革命物語の本から一字また一字とおぼえてきたものだ。そのころはざっと意味がとれればよいとしか考えていなかったの、わからない字はたいはいそのままなおざりにしてきた。だが、共産党員となつたいま、戦争や戦闘英雄についての知識だけではもうだめだ。もっと多くの道理、もっと多くのことを知って

なくちゃならない。プロレタリアートが全人類を解放し、共産党員が世界革命をやらねばならないときに、真に毛沢東思想を身につけないでどうしてやってゆけるだろうか？

「こんなに暗いのに、まだ学習をしているんですか！ 近眼にならないように気をつけなくちゃ」

魏武躍ウイフイロウが本を一冊手にしてやってきた。

「みんなより遅れているんだから、学習しなきゃ！」欧陽海は魏武躍の持っている本をさしていった。「きみもおれといっしょじゃないか！ 毎日いまごろになったら、あの石の上に坐って学習しているじゃないか！」

「おれはあんたとはちがいますよ」小魏がいった。

「おれは以前わけがわからなくて、連環面に夢中になったり、軍隊将棋にこったりして、同志たちより半世紀も遅れているんですよ。ようやくのことで射撃に興味が乗りました、自分もこれで方向がきまったと思ひこんでいたんだけど、いくらもたたないうちに、特等射撃手になるなんてつまらんとおもえてきて——」

「問題を認識するには、つねに過程というもんがあるんだよ！」